



年刊 『御坊さん』第29号

令和7年8月

発行

亀山本徳寺内・本徳寺廟所墓地管理部
姫路市亀山三四・☎079-235-0242

編集

亀山本徳寺内・真宗文化研究室

「因と縁」について思うこと

姫路市連合仏教会・会長
亀山本徳寺住職 大谷昭仁

仏陀は生死からの解脱を求めて因縁生起の理法を悟られた。今現在の事象は因と縁につぐまれて果となつて生ずるとされる。一般的には因は直接的な条件で、縁は間接的とされるが、明瞭な区別がある訳ではない。

「因縁果」の源泉は仏陀によって見いだされた十二因縁だが、「無明」から「苦」にいたる精確な因果の無限連鎖として示される。最も、この理法は釈迦滅後、各部派の教理の形成過程で、独特の十二因縁の考究がなされた。仏陀の悟りの言語的普遍化の成果と考えて良い。

しかし、苦に到る精緻な因果の認識は迷いの中にあり私としては十二もの段階を直感することなど到底できそうにない。せいぜい、無知なるが故に我執煩惱の行為が苦になって返つて来るぐらいにしか理解出来ない。

因縁生起を振りかざし、すべからず万物の事象は因と縁によって生ずるのであつて奇跡や偶然などは存在しないと主張する吾人がおられる。しかしながら、我々凡人には、仏陀のように時々



仏陀は、バラモンの難行苦行の末、ナランジャー河で沐浴をして、スジャータから乳かゆを食して、静かに菩提樹の下で瞑想に入られた。このメディテーションを通して悟りを開かれたと言われている。その内容は輪年転生の実相を十二の因縁連鎖によってあきらかにされ、その理法を領解して輪廻の無限連鎖からの解脱を得たと言われている。

刻々に変化する自己の心的状況を逐次、縁起生で感得することなど不可能だ。つまり、娑婆では、果に到る複数の因と縁が複雑に絡み合っており、その全貌を見通すことなど到底できない。この

ように能力不足の私にとっては、不可思議な因果のプロセスを奇跡や偶然として暫定的に見据えることは致し方ないことではと密かに思う。

それよりも注意すべき事は、その具体的な因・縁の相を他者に語ることの錯誤である。何故なら、娑婆の知見では複合的に複雑に絡み合った因・縁・果の関係は無数の読み方が出来る。

娑婆では、人は世間の偏った見解や自分に都合な道理に固執するのが常である。自分の都合の良いように解釈した因縁果をまことしやかに思い込んだり、他者に向かって、あるいは世間に向かって吹聴するとなると、仏陀の目指した輪廻からの解脱とは大きく乖離する。

特に現在を過去の因縁の結果として決めつけると、運命論に陥り身動きが取れなくなる。本来、因縁は未来に開かれたもので、今の行為が因となり縁となつて未来を創造するものである。このように因縁果を決定論的に固執すると未来に対する意志や希望を閉ざしてしまう。これほど愚かなことはない。不用意に他者の因縁生を語ることは避けなければなるまい。

さらに、世間では、深遠な縁起の理法を充分に留意することなく、「縁」だけを切出して多様な関係性に利用しがちだ。例えば、「袖ふれあうも多生の縁」「縁はいなものあじなもの」など、取り分け、人と人との関係とその結びつきに「縁」

が利用される。

深い関係性があるのに、敢えて自らの都合でその関係を無効にする「無縁」「絶縁」をはじめ、本来中立的な「縁」に好し悪しの価値判断を付与して「良縁」「悪縁」と言ってみたりする。このように娑婆では多様な「縁」の恣意的使用が殆どである。

関係性において人間の本质が形成されることは間違いないが、関係性のなかに埋没して自己の責任不在を正当化することがしばしばある。「縁」を自覚した以上、この縁のもたらす因果に、自分が深く関わり、それなりの責任を持たねばならぬのは当然である。この自覚が欠如すると、「縁」は単なる人間関係の偽りの飾り物になってしまう。心せねばなるまい。

一方、関係性を強調するあまり、その重圧に押しつぶされる悲劇もある。こんな時には、強迫的な関係性を一時的に断ち切って、一人静かに自問自答することも必要だろう。

気付かされる大切な「縁」に「仏縁」がある。関係性の中で人間は育つが、一人生まれ一人逝く存在である事実を自覚し、自分のいのちの有り様とその行く末を問うという自己の生き死に目覚めることは、仏との関係性を通して、正しく自己の本性を理解する上で重要な「縁」である。

仏教の「因果」と科学法則

仏教の「因果」つまり「因縁生起」は仏陀の内観を通して見る事の出来る輪廻転生の解明である。一方、科学の方法は対象とする現象を詳細に観察し適切な仮説を立て、その法則性を観察や実験により出来るだけ「縁」(ノイズ)を排除して精査し、より信頼性のある法則を発見するプロセスを持つ。

一見して両者とも同様な因果の構造をもつため、両者は同じであるとみなし、残念なことに仏説の「因果」は全く科学の法則的因果と同等と勘違いして、科学の信頼性に ayakatte 仏教の正当性が強調される。

このような主張は世間ではよく見聞され、世人も納得しているようだ。しかし、私の科学者としての実感は相当な違和感がある。そのような話を聞く度に、科学は正しい。だから仏説も正しいとする主張は明らかに間違っている。

成程、因果律は科学法則の基本原則である。しかし、その法則化は極めて限られた状況に限定され、多くの自然現象を相手に厳密に成り立つと言いきれるほど甘くはない。破断現象をはじめ気候変動や地震予知にいたるまで、多くは経験知が有効であることが知られている。人間の精神活動を始め社会や経済の現象ともなればもはや厳密な科学の方法論の適用は諦めねばなら

ない。このように科学が適用できるのはほんの限られた現象に過ぎない。

科学の法則は出来るだけ、ノイズである縁を取り除いて、想定される因果法則を正当化する営みを通して、現時点で最も信頼性のある法則として提示されるのみである。

ここで、特に言及すると、現象の背後に絶対的な法則があるという信念は、科学史の研究によると、「神」によって創造された一神教の世界と直結している。

更に仏教の営みと科学の営みの大きな違いは、認識する主体と、認識される客体の関係である。科学の場合はこの関係は交わることなくどこまでも峻別され、客体だけが認識対象となり徹底的に研究の対象となる。そこでは主体は終ぞ問われることはない。

それに対して、仏教は最終的にこの主体と客体の対立が無効になる。客体をとおして主体の有り様があきらかにされる。

よく言われるように仏や浄土は、主体となる人が認識する対象ではなく、仏や浄土が、主体である私を照らし出して、私自身が明らかにされることである。

しかしながら、仏教の「因果」を「私」の知識として捉えようと、目的と手段が転倒し、大いなる混乱を招くことになる。

私事で恐縮だが、近年感じたことを述べてみよう。昨年も何とか生きることが出来た。いろいろ

ろな社会活動や日常生活を営む上で、多くの人と関係を持ち、多くの体験をさせて頂いた。その行為の渦中にあるときは、多くの支えてくれた人や状況を逐次正確に意識することは難しい。さりとて、そのまま時の流れに身をまかすことなど、そう易々とはできるものではない。

人は事をなせば他に影響を与え、必ず自分に跳ね返ってくる。これを自業自得と人は言う。自らのなしたすべの行為（業・カルマ）が、人知では計り知れない複雑な経緯を辿って我が身に返ってくるということらしい。しかし、この道理がかるうじて見えるのは、相当後になってからで、しかも、分かるのは希なことである。

大半は見えないことが多いどころか、適当に自分の都合に合わせて、因・縁・果を解釈してしまう。得になれば自らの努力が因であり、損すれば他者の失態が因となる。これに固執して抜き差し出来なくなると自業自得は自暴自棄になる。これが私の感じた因縁生起である。

「私」の「始まり」について

大乘の論（俱舍論）には、「父母の精血を縁に、自らの業識より娑婆世界に生ず」とある。父母による遺伝的身体は「縁」となる。人の始まりを考えるには大切な条件である。受精卵が十月十日、母親の胎内で加速度的に分裂し数十兆の細胞が分化して呼吸器系・循環器系・免疫系が

出現すると言う。これらを統合する脳・神経系が出来上がるが、脳が未成熟なため、まだ「私」という高度な自意識は生み出されないそうだ。

「因」となる自意識の発現は、分娩の後六ヶ月から一年掛かると言われている。

母親の胎内の穏やかな環境は分娩によって激変する。外界の過剰な刺激は、その情報処理するために脳の急速な発達を促し、赤ちゃんの脳を肥大化させると思われる。



脳が肥大化し認知・認識・記憶という機能が整った頃、自覚することなく「私」という自意識が発現する。ちょうど準備万端整った燭台の蝋燭に火がともるように、「私」という自意識が煩惱の火となつて燃え始めるという想定である。これが「自らの業識より生ず」に相当する。弘法大師空海は暗闇より一人生まれるが、その瞬間は分からないと言う。

人の生命の点火は蝋燭の炎に喩えられる。「私」

という存在は蝋燭の炎のようなもので、状態はあるが実体はない。

しかし、脳の記憶という機能があるため、昨日の私は今日の私であり、明日の私であると、実体があるがごとく錯覚を起こす。蝋燭の火は風邪が吹けば消えそうになるし、油を掛ければ烈火のごとく燃える。燃え方は条件によって異なる。これが「私」の存在だと釈尊はおっしゃる。身体は遺伝的継承があるものの、親と子は全く別の「私」を生きこなすのである。赤子が自意識をもち煩惱を内包しながらそれを調御する主体の形成が始まる。

この時期に親と子の大切な関係が始まり、この関係性はお互いの精神の成長を促し、特別な人間関係を構築していくことになる。これが親と子の縁または絆と言われるものである。

（真宗文化研究室）

姫路市連合仏教会第14回講演会

講師 久保田智子（姫路市教育長）
演題 「ご縁で家族になりました」
日時 2025年8月24日（日）
開場 13:00 開演 13:30
会場 アクリエひめじ（中ホール）

姫路市連合仏教会の定例講演会が上記の要領で開催されます。姫路市教育長・久保田智子さんをお迎えし、ご自分の養子縁組の体験を交えてお話をいただきます。姫路市長にもご参加いただき私の司会で「縁」をテーマに語らいを持つ予定です。極暑のなかではございますが、ご関心のある方は是非ご来場頂ければ幸いです。参加料は無料です。